

ATL 母子感染予防と哺乳方法の指導

多田 裕^{1,4)}, 宇賀直樹¹⁾, 布施養善¹⁾, 清水光政¹⁾,
根本優子¹⁾, 若江恵利子¹⁾, 嶋田ゆりの¹⁾, 田中政信²⁾,
重田勝義³⁾, 三科 順⁴⁾, 千田大作⁵⁾

要約：ATL抗体陽性の母親から出生した児30例に抗体検査を実施した結果、陽性は2例で母乳哺育児でも感染率は低かった。陽性の母児の哺乳期間と出生順位を調査したところ、母乳を長期間に哺乳し、末子または次子との間隔が開いている例が多かった。これらの結果から、母乳を長期間しかも多量に哺乳した場合に感染率が高くなるのではないかと推測され、この点を検討することが哺乳方法を指導する上で極めて重要であると考えられた。

見出し語：哺乳指導、感染率、哺乳期間、出生順位

研究方法：ATL抗体陽性の母親から出生した児が、母乳で哺育された場合には、人工栄養の場合に比べ感染率が高いことが明らかにされている。しかし、母乳で哺育された場合でも、全ての児がATLV感染を起こすわけでなく、また、近年は感染率が低下していることや、哺乳期間が感染率に影響するのではないかとこの成績も報告されている。

最近では一般の妊婦のほとんど全てが、妊娠中から母乳で哺育する事を希望する。このためATL抗体陽性の母親が母乳を中止した場合には、周囲の他の母親が母乳を与えている中で、出生直後から一滴の母乳も与えられないことに心理的に大きな影響を受ける。

生後短期間であっても、母乳を吸わせることが出来れば、母親の心の負担は大きく軽減され

1) 東邦大学医学部新生児学研究室 (Dep. of Neonatology, Toho University School of Medicine)、2) 同第一産婦人科、3) 同輸血部、4) 築地産院小児科、5) 同検査科

る。哺乳方法の選択に当たっては、この点が極めて重要なので、生後の哺乳期間が、感染にどのような影響を与えるかを検討してみた。

対象は、東邦大学医学部大森病院および東京都立築地産院で出産したATL抗体陽性の母親およびそれらの母親から出生した児とし、栄養方法、母乳の哺育期間、出生順位などを検討した。

結果：1) ATL抗体陽性母体から出生した児への感染

ATL抗体陽性母体から出生した児およびその同胞の内、生後12カ月以降の時点でATL抗体の検査が可能であった児は30例あったが、このうちATL抗体が陽性であった例は表1の症例24と症例30の2例であった。症例15はPA法で生後14カ月で16倍であったが、1F法では陰性であり疑陽性と考えられるが引き続き観察中である。他の27例は全て陰性であった。

これらの児の母乳哺乳期間は、表1に示した通りで、7カ月以上の母乳栄養は2例で感染は1例、6カ月以内の母乳栄養は11例で感染は1例、人工栄養6例からは感染0であった。

2) ATL抗体陽性者の母乳哺乳期間

ATL抗体陽性者(母親および児)から母乳を哺乳していた期間を聴取した結果は次の通りであった。

人工栄養：0 6カ月以内：3
7-11カ月：1 12カ月以上：10
母乳だが期間不明：4

3) ATL抗体陽性者の出生順位

ATL抗体陽性者の出生順位は図1の通りであり、18例中8例が末子であった。丸の中の数字は次子との年齢差を表わすが、3才以上離れていたものが10例中6例であった。

母親の出生順位を、昭和35年の全国統計での順位別出生数と比較したものが図2であるが、ATL抗体陽性者では出生順位が高いものが多かった。

考案：我々の検査し得たATL抗体陽性の母親から出生した児の感染率は、従来の報告と比較して低かった。母親の抗体価が高い例でも感染していないことから、母乳を飲む期間あるいは量的な差により感染率に差が生じることが示唆される。

そこで、陽性者の母乳を哺乳していた期間を調査したが、長期に哺乳していた例が多かった。また、出生順位では、当時の一般人口に比較しても出生順位の遅いものが多く、また次子との間隔が長いものが多かった。母乳で哺育した4例の内、3才まで母乳を飲んでいていた児のみが感染した症例24もこの例にあてはまる。

これらの結果は、母乳を長期間しかも多量に哺乳していた場合に感染の危険が高くなるとの仮説を支持するものであった。

最近では母乳哺育であっても、乳児期中期から後期になると離乳食により十分な栄養が摂取され、母乳に依存する度合が低下している。このことが我々の成績で感染率が低かった原因の一つであると推測しているが、これが事実であれば、哺乳方法の選択に当たっての指導は容

易になる。今後この点に関しても検討し、早急に結論を得ることが必要であると考えられた。

表1

HTLV-1 母子感染追跡結果

:母ATL: 児氏名 : 性別 : 栄養方法 : 月齢 :ATLA抗体:

1	25600	横○1	女	母乳12m	26	1
2	25600	横○2	男	母乳7m	24	1
3	8192	藤○	男	母乳1m以内	67	1
4	4096	江○1	女	母乳13m	53	1
5	4096	江○2	男	母乳22m	30	1
6	4096	真○1	女	母乳10m	105	1
7	4096	真○2	女	母乳10m	64	1
8	4096	中○1	男	母乳5m	62	1
9	4096	中○2	女	母乳18m	36	1
10	4096	片○	女	人工(1d)	43	1
11	2048	額○1	女	母乳2m	133	1
12	2048	額○2	男	母乳2m	60	1
13	2048	早○1	男	母乳7m	68	1
14	2048	早○2	男	母乳3m	31	1
15	2048	大○	女	人工	14	16
16	2048	大○1	女	混合3m	65	1
17	2048	大○2	女	人工	12	1
18	2048	武○	女	人工	12	1
19	1024	伊○	男	混合3m	12	1
20	1024	高○	男	人工	12	1
21	1024	小○1	女	母乳3m	61	1
22	1024	猪○1	女	母乳1y	96	1
23	1024	猪○2	女	母乳1y	73	1
24	1024	猪○3	男	母乳3y	52	256
25	512	佐○1	女	母乳3m	61	1
26	512	小○2	女	人工	86	1
27	512	上○	女		17	1
28	512	大○	男	母乳1yでも	12	1
29	512	中○	女	母乳4m	17	1
30	256	佐○2	男	母乳4m	46	2048

図1

ATL抗体陽性母体の出生順位

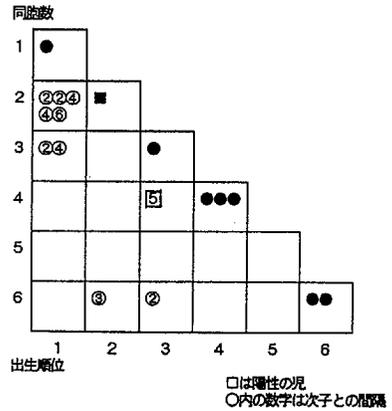
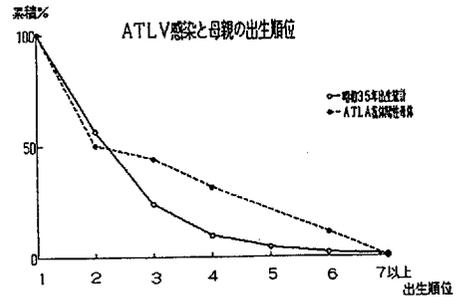


図2





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:ATL 抗体陽性の母親から出生した児 30 例に抗体検査を実施した結果、陽性は 2 例で母乳哺育児でも感染率は低かった。陽性の母児の哺乳期間と出生順位を調査したところ、母乳を長期間に哺乳し、末子または次子との間隔が開いている例が多かった。これらの結果から、母乳を長期間しかも多量に哺乳した場合に感染率が高くなるのではないかと推測され、この点を検討することが哺乳方法を指導する上で極めて重要であると考えられた。